

女性写真家の開拓精神（8） 杉浦邦恵「公園」

批評家 竹内万里子

2020/6/12付 | 日本経済新聞 朝刊



Courtesy of Taka Ishii Gallery

やや大きさの異なる2つの矩形（くけい）が、左右に接している。右側はモノクロ写真、左側はアクリルを塗ったカンヴァス。写真の風景に奥行きを感じても、視線を左に逸（そ）らした途端に黄緑色の表面に跳ね返されてしまう。次第に2つのイメージの間で宙づりになる。

この作品を制作したのは杉浦邦恵（1942年愛知県生まれ）。63年に単身渡米し、シカゴ美術学校で写真を学んだ。絵画や彫刻がまだ美術の主流だった当時、写真を専攻する学生はほとんどいなかったという。そこでニュー・バウハウスの流れをくむ写真教育を受け、以来ニューヨークを拠点にフォトグラムやフォトカンヴァスなどによる実験的な作品を意欲的に手がけてきた。この作品も、写真と絵画を融合させようとしたものだ。

杉浦の作品にはつねに、光で描かれる写真の特質に対する着目と、狭い領域にとらわれない自由な実験精神がある。そして「撮る」ことは写真による創造行為のごく一部でしかないと教えてくれる。しかしその独自の歩みは、日本の写真界の流れとはずいぶん異なるものであったために、これまで十分に評価されてきたとは言い難い。杉浦の作品を貫く真の自由な精神は、時代を超えて受け継ぐにふさわしい。

(1979年)

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.